

# 佐岡の原風景

今西 隆男\*

(受領日：2017年5月8日)

高知工科大学客員教授，佐岡地区地域振興推進協議会事務局長  
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

\* E-mail: takao.imanishi@gmail.com

要約：佐岡地区では、昭和35年からの55年間に人口は半数以下にまで減少しているが、世帯数の減少は10%程度で、1世帯当たりの家族数が半減し、高齢化や独居世帯の増加が進み、子供の数の減少が著しい。昭和30年頃の佐岡では、家庭には車やガス、石油は殆どなく、不便な生活であったが、田畑を耕すとともに桑や果樹を栽培、農閑期には植林の手入れを行い、家畜を飼って農林地を効率よく活用して生活していた。子供は山や川で遊び、自然の中で多くの事を学んでいった。山村には貧しいながらも、多くの若者が暮らし、心豊かな時代であった。しかしながら、高度成長期以降、一極集中化が進み、過疎化・高齢化、生活様式や産業構造の変化等によって、農地への植林や耕作放棄地が増加し、以前の面影を見ることはできなくなってしまった。現在進行中の佐岡プロジェクトには、里山社会を再生し、忘れ去られようとしている「佐岡の原風景」を取り戻すことが期待されている。

## 1. はじめに

佐岡地区は、物部川の右岸に位置し、下流側から比較的平地の多い佐野、大平、仁井田、本村、山間部の西後入、大後入、中後入、有谷、佐竹の9地区からなり、最も上流側に位置する佐竹地区は香北町に隣接する。地名の起こりは、南の半坂山を北に向かって越える時、物部川は右に、連なる丘陵は左に望まれることから「佐岡」の地名が生まれたとも伝えられている<sup>1)</sup>。

佐岡地区の中心的な存在であった香美市立佐岡小学校が、平成25年3月末に創立以来138年の歴史に幕を閉じ休校となり、その後廃校となった。佐岡小学校の創立130周年を記念してつくられた記念誌「大銀杏のもとで」を開くと<sup>2)</sup>、小学校で開催された運動会や地区民が参加する多くの行事の写真を見ることができる。グラウンドには多くの元気な児童生徒の躍動する姿があり、見ていると歓声が聞こえてきそうな気がする。しかし、佐岡小学校が廃校になった今、グラウンドに子供の姿を見ることは滅多になく、あちこちに雑草が生い茂っている。全国的に過疎化、少子化、人口の一極集中が進む昨今、小中学校の統廃合が進み、このような風景は全

国の至る所で見られるようになり、集落が消滅または存続が難しくなっている地域も増加傾向にあり、中山間地域にとっては深刻な問題となっている。

急速に進む過疎化・高齢化、生活様式や産業構造の変化等により、山村を取り巻く状況や風景は、戦後の混乱期から10年が経過し、高度成長が始まった昭和30年頃からのおよそ半世紀の間に、すっかり様変わりしてしまい、耕作放棄地や獣害被害も増加して、以前の面影を見ることはできなくなっている。

このような中、佐岡地区では高知工科大学による「里山基盤科学技術の社会実装モデルプロジェクト（佐岡プロジェクト）」が進行中であり、科学技術をベースとした里山の再生手法と信頼できるコミュニティの拡大手法を現実の社会に実装することを目的に建築・土木・環境・電子・情報の分野からのアプローチが進められている<sup>3)</sup>。このプロジェクトの成果には、忘れ去られようとしている「佐岡の原風景」を取り戻すことが期待される。本稿では、佐岡地区の住人として昭和30年頃の佐岡地区の生活等を振り返ることにより、かつての里山の景観を思い起こしたい。

表 1. 地区別の戸数・人口と石高

| 旧字名 | 戸数  | 人口    | 石高      |
|-----|-----|-------|---------|
| 佐野  | 62  | 240   | 214,253 |
| 佐岡  | 40  | 168   | 124,933 |
| 後入  | 111 | 487   | 185,338 |
| 大平  | 42  | 187   | 103,188 |
| 佐竹  | 43  | 195   | 21,040  |
| 有谷  | 44  | 186   | 68,463  |
| 計   | 342 | 1,463 | 717,215 |

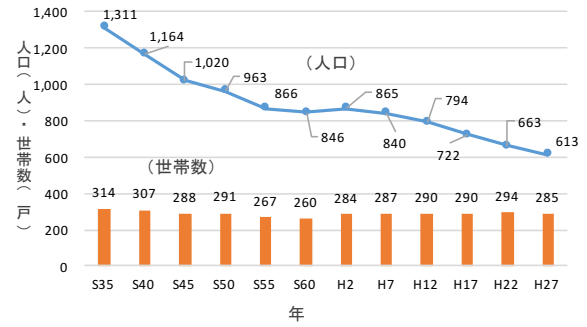


図 1. 佐岡地区の人口と戸数の推移

## 2. 佐岡地区の人口の推移

佐岡地区の成り立ちは日当たりのよい平坦地が早く開け、次第に山間部が開発されたと考えられているが、平氏の落人の子孫と伝えられる姓が多いこと等から、早い時期から開拓された地域もあると考えられている。しかしながら、寛保郷帳（1743年）の戸数と人口及び元禄郷帳（1700年）の石高をみると（表1）<sup>4)</sup>、戸数・人口は後入が最も多く、それに佐野が続き、他の佐岡、大平、佐竹、有谷はほぼ同じ規模となっている。また石高は平地の多い佐野地区が最も多いが、それに後入地区が続いている。現在、後入（大後入・西後入・中後入）は佐岡地区では最も過疎化が進行している地域であるが、この頃は多くの家屋が立ち並び、農地も多く、大勢の人で賑わっていたと推測されるものの、現在の状況から当時を想像することは難しい。また、戸数と人口の合計をみると、昭和30年頃と大きな差はなく、山間部から徐々に平野部へ移動していったのではないかと考えられる。寛保郷帳には牛・馬の頭数の記録もあり、貴重な財産であったことが伺われる。

昭和35年から平成27年までの佐岡地区の人口と世帯数の推移を図1に示す。昭和35年には1,311人だった人口は、昭和60年から平成7年頃に横ばいの時期があったものの、ほぼ右肩下がりで推移し、平成27年には613人と半数以下にまで減少している。一方、世帯数は314世帯から285世帯まで10%程度減少しているもののほぼ横ばい状態である。1世帯当たりの家族数は平均4.2人から2.2人まで半減している。背景には核家族化や若者の流出とそれに伴う子供の減少、独居世帯の増加等によるものと考えられる。地区別の人口推移を図2に示す。大後入、西後入、中後入、有谷、本村地区の減少量が大きいものに対して、佐野、仁井田、大平の減少は比較的緩やかである。これらの地域は平地が多いことや

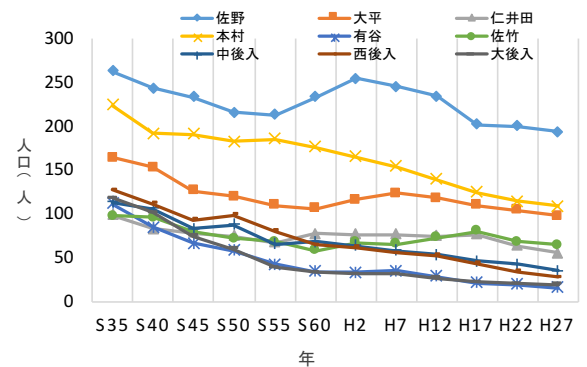


図 2. 佐岡地区の地区別人口の推移

香美市の中心部から近い位置にあることによると考えられ、地域外からの移住者も多い。また佐竹地区は山間部にあるものの、眺望に優れた環境等から比較的減少が少なく、他地域と比べると若者も多い地域である。

佐岡小学校の卒業生の明治29年から平成23年までの推移を図3に示す<sup>5)</sup>。年度により比較的大きな変動がみられるものの、右肩下がりに推移し、昭和40年頃からの減少が著しい。これは人口の推移と比較すると減少の割合が大きく、子供の減少と高齢化など年齢構成の変化に起因すると考えられる。昭和55年からは10名に満たない年度も多く、休校の直前は数名となっている。小学校の存続の目安の一つが全校生徒10名といわれていたが、休校時の全校生徒は10名程度まで減少していた。

## 3. 昭和30年頃の佐岡

昭和29年9月1日、山田町、明治村、大楠植村、片地村、佐岡村、新改村の1町5村が合併し「土佐山田町」が発足し、「佐岡村」は土佐山田町の一地域となった。佐岡村の中心地であった本村地区には旧村役場庁舎や小学校、保育園があり、その周辺には雑貨店や酒店、美容院、理容店、豆腐店等の商店

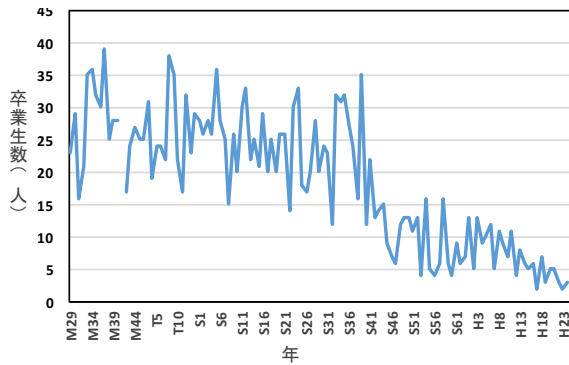


図3. 佐岡小学校の卒業生数の推移

があった。また、駄菓子や玩具などを販売する小さな店が数か所あり、小遣いを握りしめて訪れる子供で賑わっていた。昭和30年代、日本は高度成長期であり、中学校を卒業した若者は「金の卵」として、集団で都会に向かった時期でもあった。一方、山村には一定の人が住み若者も多く活気に溢れていた時代でもあった。

車を所有する家庭は殆どなく、土佐山田町の中心地や高知市等に行くには、佐岡線または東佐岡にあった釜ヶ淵の吊り橋を渡って南岸を通るバスを利用した。佐岡を走るボンネットバスの車内には車掌さんがいて切符を販売しており、大体いつも満員で、雨の日などはぎゅうぎゅう詰めであった。地域内での移動手段は専ら徒歩であり、各地区を結ぶ小さな歩道にはいつも老若男女の多くの人の流れがあった。農村の生活をみると、家庭の燃料は、主に薪や木炭であり、佐岡はもとより日本中の山村で木炭が生産されていた。木炭は大きく黒炭と白炭に分類されるが、佐岡地区では広葉樹林の中に小さな窯を築き、その周辺の木材を伐採、現地で玉切って黒炭を生産していた。出来あがった炭は炭俵等に入れ、人力または木馬などを使って車道まで運搬していた。今でも歩道にしては少し広い木馬道が残っている所もある。何回か製炭して窯の周辺の立木が無くなると、次の場所に移動して新しい窯を築くということを繰り返していた。そのため、今でも山林の至る所で丸い炭窯の跡を目にすることができる。木炭は、貴重な燃料であるとともに農家の収入源の一つでもあった。

一般的な農家では、台所にはかまどがあり、薪で炊事を行い、冬場は家族が小さな火鉢を囲んで暖をとっていた。しかしながら、昭和30年台に始まったエネルギー革命により、急速に石油やガス、電気に変わっていき、薪や木炭の需要は激減していった。高知県の木炭生産量の推移を図4に示す<sup>6)</sup>。戦後、木

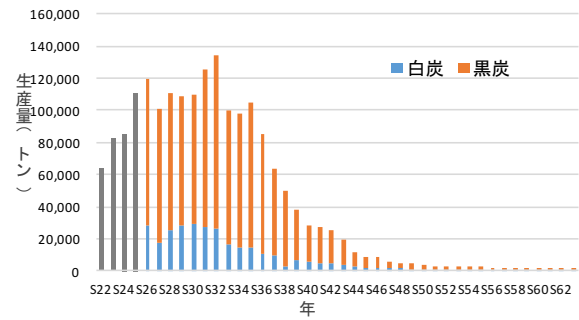


図4. 高知県の木炭生産量の推移 (S22-25は白炭・黒炭の総量を示す)

炭の生産量は急増し、昭和32年に134,519 tであったが、その後、急激に減少を続け、30年後にはピーク時の1%にまで減少した。現在は、生活の中での利用は殆どないが、バーベキューなどのレジャー用や焼き鳥等の営業用、また土壌改良材や水質浄化用などの新用途での利用が見直され一定の需要がある。

山間部では、農林地を余すことなく活用して、段々畑の田畑を耕し、養蚕用の桑や種々の果樹、林間でのシイタケ栽培等、そして農閑期には植林の手入れを行い、ヤギやニワトリを飼って、卵や鶏肉、ヤギの乳を得るといふ、農林家の複合経営であり、一部自給自足的な生活であった。買い物には頻繁に行くことはできなかったが、天秤に魚をいれた商人が、細い坂道を歩いて、個々の家を回って魚を売り歩いていた。冷蔵庫のない時代、保冷用の氷を少し貰うのが子供の楽しみであった。また富山から来たという薬売りは背中に大きな荷物を背負って、縁側で、置き薬の減った量の代金を受け取り、不足分を補充していった。

『三種の神器』といわれた白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫の家電製品や電話が普及し始めた時期でもある。電話の始まりは、まず、有線放送電話で、電話をかける時は受話器を上げ、交換手呼び出して相手の電話番号を伝え呼び出してもらう。また、電話がかかって来るときは、電話機のスピーカーから交換手の声で番号が呼ばれるので、自分の番号だったら出る仕組みであった。次に昭和39年頃から農集(集団農村自動電話)が普及しはじめた。これは一見、近年までみられた黒電話の様であるが、各戸が夫々電話番号を有しているものの、10戸くらいが同じ回線を使用していたため、同じ回線の誰かが話している時は利用できなかった。この当時は、市外に電話するときには、「100番」に電話して交換手につないでもらう必要があり、隣町に電話するの

にも相当手間がかかったものである。そして、徐々に、電話機の色も黒からカラフルになり、ダイヤルからプッシュホンへと変わり、その後の進歩はめまぐるしく、現在のスマートフォンに至っている。

車は減多に通らない時代であり、子供たちは皆、歩いて通学し、片道1時間以上をかけて山道を通う者もいた。下校時は真直ぐに帰ることはなく、寄り道をしながら帰ったものである。子供の遊び場は、専ら野外の川や山であり、川でウナギやハエ、ゴリ、カニなどを、山では“こぼて”をかけて野鳥を捕り、おとりを使ってメジロを捕って家庭で飼っていた。今は鳥獣保護法の規制が厳しいが大らかな時代であったといえる。遊びの中で野鳥や魚類の捕獲方法、食べられる植物の見分け方、木や竹の加工方法などを習得するとともに、時には小刀で怪我をして傷つくことの痛みも覚えた。子供は遊びや自然の中で多くの事を学んでいった。また、食べ物の少ない時代、アケビなどの木の実が貴重なおやつであり、いつ頃、何処で、何が採れるかを知っていたものである。

#### 4. おわりに

佐岡地区の森の中に入ると、かつて利用していた歩道や水路を目にすることができる。しかし、その痕跡はあるものの、利用されなくなって久しく、樹木の成長や崩壊等により満足に歩くことさえ難しい箇所も多い。また、水路もここに水が流れていたことが信じられない程の変わりようである。

平地の少ない佐岡の山間部では、古来より斜面を切り拓き、石垣を築いて段々畑などの農地を確保するとともに、栽培に必要な水を供給するための延々と続く水路を開設してきた。昭和22年に米軍により撮影された空中写真をみると、山の上の方にまで田畑が広がっていたことが確認できる。しかしながら、高度成長期以降、前述のように若者の都会への流出等による過疎化や国策としての造林事業の推進により、山間部の大半の田畑にはスギ、ヒノキの針葉樹が植栽され、樹木の成長や手入れ不足による下層植生の減少による表土の流出等により石垣も崩れ、かつての青々とした緑豊かな農地の面影をみることは出来ない。急速に増加している獣害被害も、里山に人が入らなくなったことが大きな原因の一つであると考えられ、かつてのように、同じエリアの中で人と鳥獣や植物等が共生することが出来なくなってしまっている。健全な人の生活や営みがあることにより自然との調和が保たれ生態系が維持される。先人が長い歳月をかけて人力のみで築い

てきたであろうこれらの農地や構造物は、僅か数年で復元が不可能な状態になってしまう。

地方の過疎化・高齢化や都会との格差が進む一方で、生活様式は全国的な差が小さくなり、田舎でも都会と同じような電化製品を使って快適な生活を送ることが出来るようになった。今では、木質資源の豊富な佐岡地区でも薪を利用する家庭は殆どなくなってしまった。昭和30年頃は夢物語であったことが現実となり、便利になった現代社会は多くの物に満ち溢れ、ネットで注文すれば2-3日後には大抵のものが家庭にまで届く。年中、殆どの種類の野菜類や食品等を買求めることができるが、産地をみると外国産が多くを占める現実もある。確かに、一見、私たちの生活は豊かになったように見えるが、本当に心まで豊かになったのだろうか。快適さや便利さを求め、地産地消が推奨されていると言いつつも、少しでも安いものを海外等へと求めている。きっと、現在の社会に疑問を感じながら快適な生活を享受している人は少なくないと思うが、一旦、覚えた便利さを手放すことは難しい。

しかし、ここで、少し立ち止まって過去を振り返り、貧しく不便であったものの、人間味豊かであった時代の生活や山村風景を思い起こしてはどうだろうか。高知工科大学が進めている「佐岡プロジェクト」は、今の時代に心豊かな暮らしを取り戻し、豊かで美しい里山社会の再生に繋がるものと確信している。

#### 文献

- 1) “土佐山田町史”, pp. 737-738, 1974
- 2) “佐岡小学校130周年記念誌「大銀杏のもとで」”, 2004
- 3) 高木方隆, “「基盤科学技術を用いた里山再生の必要性」”, 高知工科大学紀要, Vol.13, No.1, pp. 31-35, 2016
- 4) 下中邦彦, “日本歴史地名大系第40巻 高知県の地名”, 株式会社平凡社, pp. 223-225, 1983
- 5) “香美市立佐岡小学校休校記念誌「さおか」”, 2013
- 6) “高知県の林業”, 1953 他

# Original Landscape of Saoka

**Takao Imanishi\***

(Received: May 8th, 2017)

Visiting Professor, Kochi University of Technology  
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

\* E-mail: [takao.imanishi@gmail.com](mailto:takao.imanishi@gmail.com)

**Abstract:** In the Saoka area, the population has decreased to less than half in the 55 years since 1960. However, the decrease in the number of households was only about 10%. The reasons may come from the following: the number of people per household has halved, aging progressed, single member households increased, and there has been a decline in the number of children.

In Saoka around 1955, there were not enough cars, gas and oil in the household. Most farmers were cultivating their fields, mulberry and fruit trees, keeping livestock, and managing afforestation themselves. They used agricultural land and forests efficiently. Children played in the forests and rivers, and learned a lot from nature. Many young people lived with high spirits in the village. However, after a high growth period, a concentration of people moving to urban areas depopulating the village, and the progression of age; the afforestation of agricultural land and the devastation of cultivated land increased. The lifestyle also changed, so now we are unable to imagine the original landscape.

The “Saoka Project” will create a new lifestyle using traditional culture and new science technologies. The original landscape of Saoka will reappear one step at a time.